



全十六回にわたる連載を終えた、島田潤一郎さんと篠田宏昭さんによる往復書簡「本のゆくえ」。緊急事態宣言が解除されたいま、挿絵で伴走してくださった正一さんとともに、連載を振り返っていただきました。

### コロナ禍で考えたこと、見えてきたこと

**編集部** 往復書簡での連載が始まったのは二〇二〇年八月号で、緊急事態宣言が続くなか、いつになったら人々が安心して集い、話せるようになるのか、先行きがまるで見えない時期でした。

**島田** もともとぼくは、「本のゆくえ」というタイトルで連載をしていたんですね。そこでは、仕事で感じたことや、本にまつわるあれこれを書いていたんですが、あるとき「連載を往復書簡に切り替えていただけませんか？」というお話をいただいて、できれば挿絵も入れたいということでした。

**編集部** 弊誌では、対談を掲載することがわりと多いんです。対談のいいところは、会話のライブ感や、そ

の人ならではのネタや話ぶりといった話し手の「肉声」みたいなものに触発されて、読み手の想像や興味、関心が広がっていく点だと思うのですが、コロナ禍では対談収録もままならず……。そこで、対談に近いかたちで読み手の内面に触れるような連載ができないかと思い、考えついたのが往復書簡でした。

なぜ島田さんをお願いしたのかというと、連載タイトルが「本のゆくえ」だったことが大きいと思います。本の未来というものは、本のつくり手や読み手はもちろん、そのどちらでもない人にもかわることで、簡単に予測がつくわけではない。そんなテーマについて、手紙という、時間のかかるメディアを通して、対話を重ねることができたら、興味深い読み物になるのではないかと思っただけです。それで、そのお相手を島田さんに考えていただいたのですが、なぜ篠田さんと書簡を交わしてみたいと思われたのですか？

**島田** ぼくは一人で出版社の仕事をしているので営業も自分で行くんですが、篠田さんのところへ行くといつも三十分くらいはしゃべっているんですね。それも、いわゆる出版や書店の業界話ではなく、お互いが最近読んだ本の話とかを。篠田さんがお勤めの増田書

店というお店がまた、昔ながらのよき書店というか、みずず書房や岩波書店の棚があったりして、いいんですよ。とくに地下のフロアが濃いんですけど、僕がお店に行くと篠田さんはたいい地下の人文のコーナーにいて、だいたいそこで話し込む。それが、僕にとっではすごく大事な時間なんです。で、同じようなことを、「話す」ではなく「書く」でやってみたいと思っ

て、篠田さんをお願いしたんです。  
**編集部** 文芸や人文系の雑誌で往復書簡が連載になる場合、あるテーマについての議論が深まるよう、ときには編集者と執筆者との間で話し合いながら進めていくものだと思うのですが、今回の往復書簡では「本のゆくえ」というタイトルを持つ大まかな方向性があるのみで、編集サイドからは「お二人が、その時々々に思っていることを書いてください」というだけでした。なので、何を書くか、話をどう進めるかはまったく執筆任せで、ご苦労をおかけしたと思います。

**島田** いちど、篠田さんに「原稿料をもらって書いているのに、このままじゃダメな気がする」と、直接相談しに行ったことがあるんです。というのも、書きたことしか書いていないと感じて、読んでいる人はそ